

---

# 男の子の格好と声のお仕事

柚唄

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

男の子の格好と声のお仕事

### 【Nコード】

N8098T

### 【作者名】

柚唄

### 【あらすじ】

性別不明の覆面声優して、男装して、全寮制男子校通って、ルームメイトがイケメン（これまた声優）っていうなんか少女漫画みたいな生活送ってます。しかし一つおいしくない話が。

僕、太ってます つまりデブ。一年の時よりは半分痩せたけど、まだまだ！ 大体、よく顔整ってる子が男装して男の子のフリってあるけど、バレるに決まってるでしょ？ デブだとバレないんだよ！

……言ってて少し、虚しいかもしれない。そんな、そんな生活、見てみませんか？

**ユウと菖蒲谷太郎（前書き）**

プロローグです。短いです。

あらすじにも書きましたが、ヒロインはデブです。

## ユウと菖蒲谷太郎

紙をそーつと捲る。音を立てたらマイクに拾われて監督に怒られてしまうから。

水無の、次の台詞。

『うちには無理やな。霜はどう思うん?』

僕の番!

『あたしは、できると思う。やろっ! きつとあたしらならできるって!』

「お疲れさまでしたー! ありがとうございましたー!」

友紀は大声を張り上げながら挨拶をする。その心はとても生き生きとしていた。

今日も頑張ったー……。

住宅街へとつながるドアを開ける。胸の中いっぱい新鮮な空気を取り込まれて清々しい。すっきりするよ。

「よ、お疲れさん」

「あー、由希もお疲れ。ていうか菖蒲谷さん」

「じゃ、オレも。ユウさんお疲れ様です」

「やめろー」

友紀を外で待ち構えていたのは、先程演っていたアニメ『月極』の主人公を演じている中村由希。同じ学校に通い、同時に寮のルームメイトである

そんな彼と収録現場初めて会ったのは、『月極』の第一話の収録の時であった。

## 中村友紀と中村由希

クーラーの止まった室内。他の共演者によってどんどん台詞が進んでいる中、ヒロイン、雪見霜役 性別不詳の現役高校生ユウは椅子にかけて息を殺していた。心臓がバクバクなって、落ち着かない。

ユウは色んな人に目を向けるが、やはり一番気になるのが主人公役の人。

主人公の七夕涼役の、菖蒲谷太郎。すぐれたルックスを持ちながら、学業優先だからとモデルの仕事は断っている現役高校生。私立の全寮制男子高、檜成学院の生徒。本名は菖蒲谷太郎ではなく、中村由希。いつもユウキ呼んでるし。

ユウが本名非公開の、彼の名前を知っているのには理由があった。同じ学校、学年、同じ部屋のルームメイト。であるからだ。

入学当時に感じていた、いつ自分の秘密がバレるかドキドキして仕方ない気持ちもとくに慣れたものだったが、今ここで再び感じることになるとは。

自分が、普段から男役をやっている、性別不詳でない声優だったらどれだけよかったか。

ユウ 本名中村友紀 は、とにかくハラハラしていた。

簡潔に言えば、友紀は女である。……纏めすぎた気がする。友紀は女で、色々事情があつて男子高に通つて、だからこんな、性別不詳でどんな役でもこなす声優だと知られるのは避けたかった。女役やったら、今にも自分が女だとバレてしまう気がするやらなくなる。だというのにヒロイン役。しかもあつちは主人公！ もう心臓が爆発しそうである。

周りの共演者が立ち上がり、ボーツとしていたと慌てて立ちあがる。友紀は、なんとなく初日からダメな気がした。

あーもうどうしようどうしようどうしよう！ もうどうしようとし

か考えられない！

「始め！」

監督の声を聞いて背筋をまっすぐ伸ばして心を切り替えた。僕は声優、僕は声優！

収録前に音声なしで流れた動画。それに合わせて声を充てればいい。いつも通りやればいい。たとえ、隣に由希がいて、気になってチラチラ見てしまつて、そしたら目線が合った。友紀は慌てて目をそらして台本を凝視する。

主人公が、ヒロインに初めて会うシーン。

町に引越してきたばかりの涼が川を散歩していたら、霜が渡り石を滑って川に落下。

『あ！』

霜はその瞬間を男の子に見られてたのを知って、涼は何をすればいいのかわからなくなつて、お互いの顔を見つめ合つてしまう。

『え、えーつと、大丈夫、ですか？』

『え、あ、は、はい、大丈夫です！ あ、あはははは！ じゃ、じゃあー！』

二人して固まつてたために、霜は川に入りっぱなし。涼に声をかけられて意識が戻つて、もう何がなんだかで恥ずかしくなつて、一目散に走り去っていく。そんな初対面。

監督から注意されないってことは問題ないんだろう。よかったー……。シーンはまだ続いてるけど、もう僕の出番はない。周りの共

演者に合わせて台本を捲るだけ。

そうやってその日の収録を終わらせた友紀は、ふうっと息をはいた。しかしまだ問題はある。由希のことについてだ。

友紀がちらつと由希を見れば、あちらもこちらを見ている。さきほどと同じ展開だと感じつつも慌てて視線を逸らそうとしたが、声をかけられたお陰でそれはできなかった。

「なあ、挨拶したとき聞けなかったけど……だよな？ お前だよな？」

小声で質問される。女だよな、などという質問が来なかったことに友紀は安堵した。

「そつだよ。そういう君は、だろ？」

お互い本名を出さないように質問する。大体、すでに一年以上の付き合いがあるのだ。そして、中村友紀という中村由希という、読み方によつては同じ名前になることにより親近感を覚え、気が合わないわけでもないから、ルームメイトとしてとても仲良くなっていた。

「にしても、女役すげえな。どうやって出してんだ？　むさ苦しい男が出す声だとは思えねえぜ」

茶化すように喋る由希に友紀はホツとする。

普通に男だつて思われてる。よしよし。ま、確かに普通はあんな声出ないしね。

「生まれつきだよ。でも、うゆ菖蒲谷もすごいよ。うまいし、顔面偏差値高えし」

本音だつた。別に嫌みとかは含めてないつもりだ。モデルやってみないかと誘われるぐらいだし、実際友紀が見ていてもかなりカッコいいと思う。そして由希のことをいつものように呼びそうになつて変な呼び方しちゃつたよ。危ない危ない。一応収録現場である。人の本名を晒してはいかん。友紀も昔はかわいいと自覚するほどだったが……その前に今の友紀はデブ、である。しかも、性別がわからなくなるぐらいの。まあそれで男子高にいれるのだが。

「いやいや。ていうかお前、最近痩せてきたよな」

「うん。卒業するときまでに普通の体型になるつもりだよ」

元々、友紀は勉強がしなくて太ってしまったのだ。食べていれば、親に勉強しろとは言われなかったから。寮生活になつてからはそんなこともできなくなつたし、何事も男子に合わせているので色々辛い。一年経てば、それが伴つてある程度は痩せていた。

「んじゃ、帰るか」

「そつだね」

「「お疲れさまでしたー！」」

そして同じようにお疲れ様でしたと返される。うん、仕事終わり！  
そうやって、始めはドキドキハラハラだった『月極』の最初の収録は、意外となんにも起きずに終わらせることができたのだ。

それと、お互いの秘密を共有することで、友紀と由希はより仲良くなることもできた。まあそれと同時に、自分の秘密がバレやすくなったということにもなるのだが。



## トモキとユウキ

学校に着いたころには空は赤く染まっていた。キレイな夕焼けに感動を覚えるとか、そういうのはないけれどキレイだと思う。いやー……太陽が沈んでくー。

「あら、お帰り。今日も仲良しねえ」

ガハハツと効果音のつきそうな声で出迎えるのは寮母さん。同時に僕の親戚でもある。

……にしても、考え事をするときに僕、か。すっごい慣れてきたな。

元々友紀が。何かでヘマを起こさないようにするために、心の中でも自分の事を僕と考えるようにしていた。そしてそれがしつかり定着していたのだ。いいことではあるのだが。

「ただいまー」「ただいまっす！」

寮母さんに軽く手をあげて通り過ぎる。別に無視したわけではない。入口に座ってるだけだしね。

「二人とも、バイトだったんですか？」

部屋に入ろうとすれば、丁度向かい側の部屋から林太<sup>リンタ</sup>が出てきた。高校二年生だと言うのにまだ声変わりは来ておらず、体も色白。

ガリガリで、ひよろひよろしていて今にも倒れそうである。前髪は伸び放題、顔は正に薄幸の少年。身長も、一応女である友紀より十センチ低い、百五十八センチであった。

「まあね。林太、今から何するの？」

「あ、ボクはご飯食べに行こうと思ってました。ユウキ君とトモキ君は？」

ユウキ、というのは友紀のことではない。由希のことである。そしてトモキというのが友紀のことであった。

少し二人の名前について整理しておこう。入学式で仲良くなり、由希の名前を見てユウキと読んでしまった人がいる。そう、読んで

しまったのだ。由希の名前はユウキではなくヨシキだったりする。そして名前を呼ばれ、「ああ俺の事指してんだな」と思い反応したところ、そのままユウキが定着してしまった。

友紀に関しては、その友達と共に自分の部屋を確かめに来た由希達がネームプレートを見れば、そこに書いてあるのはユウキと読む可能性のある字。まあよくある名前だし、まさかの同姓同名もどきのルームメイトか、と話を盛り上げらせていたところ、丁度友紀が部屋に。でもやはりひらがなだと同じって不便だよね、と考えた友達達

「中村、トモキ？」

と質問。友紀は友紀で自分の事指してるんだと判断して首を縦に振る。そしてそのまま同じようにトモキと定着した。という、とてもややこしい話がある。

それにより、友紀は由希をユウキ、由希は友紀をトモキだと勘違いしているという、これまたややこしいルームメイト関係が出来てるだなんて本人達も知らない。

「僕も行こうかな。由希は？」

「あー、んじゃ俺も行くか！」

「日野は誘わなくていいの？ それとも仕事？ 大変だよなー」

林太のルームメイトを誘わないのもどうか。

「ええ、仕事だそうで。九時には帰ってくるそうです」

……流石である。友紀は素直に日野に感心した。いやはや、遅くまでお疲れ様だ。

林太のルームメイトである日野は、歌手である。二年前にデビューして、三か月に一回CDを出す。そんな感じの人気歌手。ルックスも悪くないし、もちろん歌も上手い。

あれ、でも待てよ？ それなら由希も似たようなもんじゃないか？ 二年前にデビュー、最初は脇役が多いもののどんどん主人公系にワンクールに必ず一回は出ているし、キャラソンだって出してる。顔面偏差値高い。……すごいな。

「じゃあ寮母さんに言わねえとな」

午後九時以降に帰宅予定、または帰宅可能性がある場合は寮母に連絡すること。友達に伝言を頼んでもよし。これはこの学院のルールである。

「そっいえば、ステイプラの次のオープニング、日野が歌うんだってよ」

「え、そうなんだ？」

「マジマジ」

ステイプラというのは、週刊少年ジャンケンの連載漫画。アニメは三年目に突入した人気漫画である。矛盾の少ないストーリーが人気で、かくいう友紀も、連載当初からずっと見ている好きな作品だった。

「そっいえば、えーっと……。振り子時計だった気が……」

「何がだ？」

「その曲のタイトルですよ。丁度昨日言っていました。」

「……それ、言っているの？」

友紀が指摘すれば、もう林太は大慌てである。あわわわわ、と声が聞こえてくるぐらいだ。まあ悪気があったわけじゃないしいんだらうけど。

「ステイプラだと、僕は家富爺さんが好きです。たまにしか出てきませんでしたけど」

「へー。こりやまたマニアックな」

いや、マニアックではないのかもしれない。だが、認めたくなかった。いや、認めたくないわけじゃないが、少し照れくさい。家富爺さんは友紀の役で、こう、面と向かって言われると、ちょっと。由希がニヤニヤと友紀を見るので、足を後ろに回してひっつけた。

「でも結構人気なんですよ？あ、あとモヒも好きですね。」

友紀はすかさずニヤニヤし返した。そのニヤニヤに、照れくさいのが入っているのは本人も承知の上である。林太は無意識に褒めすぎである。

言うまでのことではないが、そうなのだ。由希は準レギュラーのモヒ役を演じている。

林太は二人の間でそんなやりとりが行われてるのも知らず、急につまづいた由希を見ては頭にハテナを浮かべた。廊下にはつまづく材料などないから。

「寮母さん、日野君、九時に帰ってきます」

「はいはい、わかったよ。健康には気をつけるんだよって言うんだよ」

はい、と答えて、慣れてしまったそのやり取りに林太は少し、何故か胸が痛んだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8098t/>

---

男の子の格好と声のお仕事

2011年6月4日17時10分発行